

M-GTA研究会News Letter No.70

編集・発行：M-GTA研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://m-gta.jp/>

世話人：浅野正嗣、阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、丹野ひろみ、塚原節子、都丸けい子、林葉子、宮崎貴久子、
三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

第67回定例研究会報告	・・・ 1
【第1報告】（構想発表）	・・・ 2
【第2報告】（中間発表）	・・・ 9
【第3報告】（中間発表）	・・・ 17
【第4報告】（中間発表）	・・・ 28
◇近況報告	・・・ 34
◇次回定例会のお知らせ	・・・ 39
◇編集後記	・・・ 39

◇第67回定例研究会の報告

【日時】2014年3月1日（土）13:00～18:00

【場所】立教大学池袋キャンパス）マキムホール3階 M301 教室

【出席者】73名

青山 真以子（国立音楽大学大学院）・赤司 千波（福岡県立大学）・阿曾 亮子（日本医科大学）・網野 裕子（岡山県立大学）・池田 明子（新見公立短期大学）・磯崎 京子（早稲田大学）・伊藤 みどり（春日井市民病院）・伊藤 美保（南山大学）・伊藤 由美子（南山大学）・牛窪 隆太（早稲田大学）・氏原 恵子（聖隷クリストファー大学）・大木 理恵（東京外国語大学）・大村 光代（穂の香看護専門学校）・小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）・貝塚 陽子（白百合女子大）・梶原 はづき（立教大学）・加藤 貴子（アクトワーククリニック）・加納 光

子（武庫川女子大学）・亀崎 明子（山口大学）・川内 健三（国立精神・神経医療研究センター病院）・河本 恵理（山口大学）・木下 康仁（立教大学）・木村 幸代（横浜市立大学）・草野 淳子（大分県立看護科学大学）・倉田 貞美（浜松医科大学）・小嶋 章吾（国際医療福祉大学）・小山 道子（上武大学）・齊藤 麻子（順天堂大学）・坂本 智代枝（大正大学）・佐々木 竹美（順天堂大学）・雫 公子（立教大学）・七條 佳代（桜美林大学）・清水 弘美（医療法人社団中山会希望の郷）・清水 史恵（京都大学）・白柳 聡美（浜松医科大学）・鈴江 智恵（日本福祉大学）・鈴木 まゆみ（いわき短期大学）・鈴木 康美（東邦大学医療センター佐倉病院）・鈴木 祐子（国際医療福祉大学）・鈴木 優子（埼玉医科大学）・鈴木 ゆみ（明治学院大学）・高橋 由美子・滝澤 寛子（京都大学）・田島 美帆（青山学院大学）・田代 ひとみ（東京外国語大学）・田中 満由美（山口大学）・田村 愛架（鹿児島大学）・田村 朋子（立教大学）・丹野 ひろみ（桜美林大学）・千々岩 友子（浜松医科大学）・塚本 恵里香（早稲田大学）・戸村 恵理（とむら助産院）・中野 真理子（東京慈恵会医科大学）・中原 登世子（早稲田大学）・根本 愛子（一橋大学）・羽鳥 栄子（早稲田大学）・林 裕栄（埼玉県立大学）・藤原 正仁（専修大学）・古尾谷 侑奈（国立成育医療研究センター）・本間 優香（神奈川大学）・前田 和子（茨城キリスト教大学）・前原 和明（栃木障害者職業センター）・真竈 理美（青山学院大学）・松戸 宏予（佛教大学）・三浦 恵美（東北大学）・緑川 綾（ひもろぎ心のクリニック）・宮城島 恭子（浜松医科大学）・宮崎 貴久子（京都大学）・三輪 久美子（日本女子大学）・向井季之（早稲田大学）・山崎 浩司（信州大学）・山田 紋子（北里大学）・鷺巣 禎江（早稲田大学）

【第1 報告】

七條 佳代（桜美林大学大学院老年学研究科老年学専攻）

Kayo Shichijo : J.F.Oberlin University Graduate School of Gerontology

「中高年女性の人生経験が将来の生き方に及ぼす影響」

The influence that the human experience of the old and middle age woman gives to future way of life

【研究背景】

平成 24 年国民生活基礎調査¹⁾によると 65 歳以上の人のいる家族を形態別にみた場合、「夫婦のみの世帯」（夫婦の両方または一方が 65 歳以上）の人が 37.5%、「単独世帯」の人が 16.1%となっている。単独世帯の構成割合を見ると、男性が 28.1%、女性が 71.9%であり女性が高齢期を一人で生きている現状がある。また、「子との同居」率も年々低下している。夫婦のみの世帯も全体の 37.5%を占めているが、男性より長命な女性は将来一人になる可能性が高い。現状においては、結婚して子どもを育てたとしても、子どもが結婚した

ら同居はせず、夫婦であるいは単独で生きる人々が増加している。現在の日本の世帯状況を見ると、女性が高齢期を一人で生きている現状があり、今後においてもその増加が予測される。

日本人は長く生きられるようになった。特に女性は長命である。武村は「一人暮らしの期間をどのように過ごせばよいのか。このことが日本人女性の重要な人生課題となってきた」⁴⁾と述べる。しかし、人生課題としての重要性は高まりつつも、「人類未到の長寿社会を実現し、経済的に安定した長い高齢期を可能にしながら、望ましい高齢期の生活像を見失っている」⁵⁾という指摘もある。また稲谷⁷⁾は、老年期における自立した生き方については「孤独や不安もともなうがそれでも高齢者自身が能動的で自律的に自分の生き方を選び取るというもの」であると述べている。また女性は配偶者が亡くなった後にも「自立が困難になった高齢女性は施設への入居などによっておこる人生最後の時期に新しい大きな適応が求められ」とし、女性は最後までどう生きるかという選択に迫られる可能性がある。これらのことから高齢期を見据えた考えの重要性が理解される。

次に、本研究の対象である中高年期について見てみる。岡本¹⁰⁾は、「人生前半期には、獲得的、上昇的变化であったものが、中年期には喪失や下降の変化へと転じる」とし、心理的特徴としては「体力の衰え、時間的展望のせばまり、自らの老いや死への直面、さまざまな限界感の認識」であると述べている。さらに年齢が高くなると喪失経験が増え、時間的展望もせばまる。老年期には「自己のあり方の根本を揺るがすような危機を体験することが示されている」¹¹⁾との論もある。

このように危機を体験することが多い中高年期に、個人の資源、中でも内的資源を生かすことは重要ではないだろうか。この「資源」ということばであるが、黒沢¹³⁾は、資源とリソースを同義として用い、それを「外的リソース」と「内的リソース」に分けている。本研究では個人の内的資源を「個人の人格特性やこれまでの人生経験を糧として培った力」とであると定義する。社会的資源の活用とともに個人の外的、内的資源を動員して、老後生き抜くことが必要であると考えた。

次に人生経験についてであるが、岡本¹⁶⁾は「人間は時間的存在である。過去の体験の積み重ねのうえに現在の自分が存在する。」としている。「特に人生の節目に過去に経験してきたさまざまな営みや他者とのかわりの意味がより深く了解され、その経験が自分を支えていることに気づくことも多い。」と述べている。平岡¹⁸⁾は中年期の人々は「今までの人生の成功や失敗経験の中で獲得した現実対応能力を駆使して、過去の人生の出来事と将来の人生の出来事の両方と均衡をとりながら、後半の人生に備える充実した中年期のあり方を考えている」としている。言い換えれば、中年期の人々は将来を生きる資源として過去の経験を生かそうとしているのではないかと考えられる。

また、「生涯発達」の観点から中高年期を見てみると、やまだ⁹⁾は「成人になってからの変化を扱うと、人の一生には驚くほどの可塑性や個人差や多様性があることがみえてきた」とも述べている。さらに「人生はどの時期も重要で、どの時期にも大きな変化可能性があ

ることがわかってきた」と言う。中原ら¹⁹⁾の研究ではその結果から「高齢期に望む生き方は現在の生き方の延長線上にある可能性」が示唆されている。つまり、中高年期の考えは高齢期へと継続する可能性が示されている。

中高年期の女性にとって、高齢期を見据えて自分の内的資源を確認し、それを生かす生き方を模索することは重要ではないかと考える。先行研究では、インタビュー調査における研究^{20~24)}や、「生き方態度」を質問紙や自由記述で調査した研究がある^{25, 26)}。しかし、中高年女性の内的資源を生かす生き方を面接において尋ねた研究は見当たらない。

本研究は、中高年期の女性が人生経験をどう自己の中に位置付けているか、これまでに培った力はどう変容してきたか、そしてその力をもとにどう生きようとしているのかを明らかにしたいと考える。女性のライフスタイルの多様化から鑑みると現代の中高年女性は非常に多様化した人生を送り、さまざまな体験をしてきたと考えられる。上述したようにやまは「成人になってからの変化を扱うと、人の一生には驚くほどの可塑性や個人差や多様性があることがみえてきた」と述べている。「可塑性がある」ことを踏まえ、その変化のプロセスをみることは女性の生涯発達的一面を知る上でも意義のあることである。女性の一生の「個人差や多様性」があることを見据え、本研究の対象は広く中高年女性とし、現代の中高年女性の生き方をとらえることを目的としたい。

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

・分析に M - GTA を採択した理由

M - GTA は研究者の問題意識に忠実に、データをコンテキストでみていき、そこに反映されている人間の認識や行為、そしてそれに関わる要因や条件などをていねいに検討していくやりかた²⁷⁾であるとされている。本研究は中高年女性を対象とし、対象者が人生を振り返り、経験からの学びとその生かし方を明らかにすることを目的としている。中高年女性の幼い頃から現在に至るまでの意識、あるいは将来への展望を尋ね、それを分析する時、多様で複雑なデータを「ていねいに検討していく」ことで研究の目的に近づく可能性があると考えた。「ていねいに検討」し女性の生涯発達の一側面をとらえたい。また、M - GTA は「研究対象がプロセス的特性をもっている場合に適して」²⁸⁾いるとされる。本研究では中高年期を迎えた女性の現在の価値観を聞き、それが以前とはどのように変化したかも明らかにしようとする。こうした変化のプロセスを見る時、M - GTA が分析に適していると判断した。

2. 研究テーマ

中高年女性が自己の特性や人生経験から培った力をどう認識し、それを将来に向けてどう生かそうとしているのか、その実態と変容のプロセスを解明する。

3. 分析テーマへの絞り込み

中高年女性の人生経験から得た学びの変容のプロセス

4. インタビューガイド

本研究の目的は中高年女性が自己の特性やこれまでの経験を将来に向けてどう生かそう

としているのか、その実態と変容のプロセスを解明することである。データを収集する方法として、面接調査を行う。

面接に先立ち、文章完成法に基づいた調査票を用いる。文章完成法とは、刺激語となる単語や短文を対象者に提示し、対象者が完成させた文章からパーソナリティや自己概念などを明らかにしようとするもの⁶⁾である。本研究では、対象者、研究者双方が対象者の考えを明確に把握し面接に臨めることを利点とし、文章完成法に基づいた内容の調査票を使用することとした。調査票は対象者に前もって送付し記入を求め、面接の前に研究者への返送を依頼した。

調査票と面接での質問は 11 項目を設定している。調査票に沿って半構造化面接を行う。調査票の概要としては、1「これまでの人生の振り返り」2「現在の価値観」3「自己の特性」4「将来の展望」についてである。それぞれの具体的項目は以下の通りである。1「これまでの振り返り」では幼少の頃からの人生経験や現在の状況について聞き、どのような人生経験がどのような学びに結び付いたのかを尋ねる。最後 11 番目に総括的な質問としてこれまでの人生を振り返り、一番意味のある経験を尋ねることとした。2では「現在の価値観」について尋ねる。現在の価値観は以前と変わってきたか、変化のプロセスを尋ねる。3「自己の特性」では特性として「長所」と「短所」について聞く。これまでの経験がどのような長所に結びついているか、また「長所を生かした今後の生き方」を聞く。次に経験が短所に結びついているか、また「短所を補う今後の生き方」について尋ねる。4「将来の展望」では将来について、自己の経験や特性を生かしてどう生きようとしているのかという展望感や見通しについて聞く。

■調査票および面接での質問項目

- ①私が育った家庭は ②子どもの頃の私は ③学生の頃の私は
- ④学校を卒業してからこれまで私は ⑤私の今の生活は
- ⑥私の大事にしている考えは ⑦私の長所は ⑧私の短所は
- ⑨私の将来は ⑩私の夢は
- ⑪これまでの人生を振り返って一番意味のある経験は

■項目の概要

- 1)「これまでの人生の振り返り」 : ①②③④⑤⑪
- 2)「現在の価値観」 : ⑥
- 3)「自己の特性」 : ⑦⑧
- 4)「将来の展望」 : ⑨⑩

面接では、まず基本属性として年齢・家族・同居家族・学歴・結婚経験の有無・子どもの有無・職歴・今の職業・今の健康状態を聞く。その後、記述された調査票の内容に沿って半構造化面接を行う。面接時間は1時間から2時間程度とする。

5. データの取集法と範囲

本研究では 50 歳から、高齢者と呼ばれる直前の 64 歳までを「中高年期」と操作的に定

義する。対象は地域に在住する、50 歳から 64 歳までの女性 10 名程度とする。抽出方法は機縁法で行う。

6. 分析焦点者の設定

地域に在住し、入院や施設入所をしていない 50 歳から 64 歳までの女性

文献

- 1) 平成 24 年 国民生活基礎調査の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa12/index.html>
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所「第 14 回出生動向基本調査」 http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp
- 3) 平成 25 年度 厚生労働省白書 <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf>
- 4) 武村由美「限界集落での“幸福な老い”―独居高齢女性のライフヒストリーより―」『高知工科大学紀要』、7（1）、2010.
- 5) 古谷野亘「サクセスフル・エイジング」『改訂・新社会老年学 シニアライフのゆくえ』古谷野亘 安藤孝敏 株式会社ワールドプランニング、2008.
- 6) 下仲順子「高齢社会と高齢者の心理学」『高齢者心理学』下仲順子 中里克治編著 建帛社 2004.
・進藤貴子「高齢期の人格、自己概念の特徴」 同上
- 7) 稲谷ふみ枝『高齢者理解の臨床心理学』ナカニシヤ出版、2003.
- 8) 園田 雅代「女性の発達臨床心理学の必要性と課題」『女性の発達臨床心理学』園田雅代 下山晴彦 平木典子 金剛出版、2007.
- 9) やまだようこ「「発達」と「発達段階」を問う：生涯発達とナラティヴ論の視点から」『発達心理学研究』22(4)、2011.
- 10) 岡本祐子『アイデンティティ生涯発達論の展開』ミネルヴァ書房、2007.
- 11) 深瀬裕子 岡本 祐子 「青年期から老年期に至るアイデンティティの変容―高齢者の語りの分析から―」『広島大学大学院教育学研究科紀要』(60)、2011.
- 12) 岡本祐子『女性の生涯発達とアイデンティティ―個としての発達・かかわりの中での成熟』北大路書房、1999.
- 13) 黒沢幸子「スクールカウンセリングにおけるキーワード」『明解！スクールカウンセリング読んですっきり理解編』黒沢幸子 森俊夫 元永拓郎著 金子書房、2013.
- 14) 森俊夫「ブリーフセラピーのものの見方・考え方」『学校におけるブリーフセラピー』宮田敬一編 金剛出版、1998.
- 15) 岡本祐子「生涯発達からみた中年期の意味―アイデンティティの危機と成熟」『教育と医学』39(9)、1991.
- 16) 岡本裕子『中年からのアイデンティティ発達の心理学―成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味』ナカニシヤ出版、1997.
- 17) 岡本裕子『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房、2002.
- 18) 平岡真理「中高年期における将来の人生の出来事の予測と準備について―第 2 の人生や退職・定年後の生活について―」『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』6、2007.
- 19) 中原純 藤田綾子「向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係」『老年社会科学』29（1）、2007.
- 20) 川口一美「中高年の老後に関する一考察―聞き取り調査を中心に」『聖徳大学生涯学習研究所紀要』10、2012
- 21) 徳田直子 杉澤秀博 「女性定年退職者の退職後の楽しみ・生きがい：現役時代の経験との関連について」『老年学雑誌』1、2010.
- 22) 田中真理 大川一郎「日本人高齢者におけるサクセスフル・エイジングの構造―半構造化面接を用いて―」『高齢者のケアと行動科学』15、2010.
- 23) 谷井康子「大都市に独居する超高齢女性の支えについて―事例を通して―」『日本赤十字広島看護大学紀要』1、2008.
- 24) 五ノ井仁美 下仲順子「高齢者におけるライフレビューと心理社会的発達の関連」『文京学院大学人間学部紀要』12、2010.
- 25) 高井範子「高齢期の人々の生き方態度 人生受容・生活感情の諸相及び高齢者支援に向けて」『臨床心理学研究』46、2009.

- 26) 高井範子「ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討：青年期から高齢期を対象として」『太成学院大学紀要』13、2011.
- 27) 木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析方法」富山大学看護学会誌6(2)、2007.
- 28) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007.

【S.V，フロアからのご意見・ご質問】

- ・「丁寧に検討する」とはどういうふうにすることが「丁寧に検討する」ことなのか。また、丁寧に検討するためには場面を限定する必要がある。
- ・研究が漠然としており、何を知りたいのか絞り込む必要がある。
- ・SCTを使用する理由は何か。
- ・50歳から64歳までの女性の社会的背景を知ることが必要である。この年代はバブルも経験している。社会の中でどう位置付けられてきたか、この時代の中でどう生きてきたかを知ることが必要である。また、この年代はアイデンティティ拡散の時期でもあり、今後、介護者になる可能性も高い。そうした中、ジレンマを感じるといったこともあるのではないか。こうした社会的背景からも見ていくことが大事ではないか。
- ・発表者は「分析テーマ」「分析焦点者」が理解できていない。このままでいくと研究がまとまらない可能性がある。しかし、原点に立ち返ると分かると思われる。「分析焦点者」を絞り込むこと。この年齢層に全て当てはまるようなことでなければならない。対象をはっきりさせること。条件設定し、絞ることが必要である。

【発表を終えての感想】

今回の発表で改めて、「自分は一体何が知りたいのか」を自問自答致しました。S.Vの小倉先生からは、「場面を限定すること」「漠然としている」「視点を絞る」等、研究の曖昧さをご指摘いただいております。自分は「中高年期女性の発達的一面」を知りたいのか、あるいは中高年女性が、経験からどう今の価値観を得たのかを知りたいのか、その変容か、あるいは、将来それをどう応用しようと考えているのか、何を一番知りたいのかを自分に問い直しました。もちろんそれは、ずっと以前に確立しておかなければならないことであったはずなのですが、混沌としていたのが実状でした。

研究の現在の進捗状況は、面接を数名実施し、逐語を起こしている最中です。小倉先生からはコメントとして、「充実した中年期のあり方を考えている人が本当に一般的なのか」とのご指摘を頂いております。実際の調査においても、面接させていただいた中高年女性は、今後のあり方については、「まだ、途上」「これからも人生は続く」といった、「これでいく」という確かな方針は定まっていない状況のように思われました。「中高年ではある程度価値観が定まり、今後の生き方も確立されているのでは」といった自分の考えが浅かったことも理解することができました。こうしたことも考え合わせて、自分が一体何を知りたかったのか、突き詰めて考えました。すると、これまでの経験から得たものを将来、どう生かすかはまだ確立されてはいないけれども、経験から得た価値観はある。その変容を明らかにしたいと思うようになりました。

この発表を通して、自分が今まで考えていなかった視点を得ることができました。かつての職場を退職し、現在は就職していない私にとって、修士論文を「誰のために書くか」という点も悩んでいた点です。しかし、小倉先生より「興味を持った方が読んでくれば良い」「論文にすることが重要」とのお話を頂いて安心し、つかえが取れたような嬉しさを感じました。今回、拙い内容にも関わらず発表する機会を頂き、有り難く思います。今後は、何を明らかにしたいのかという研究の原点に立ち返り「分析テーマ」「分析焦点者」を設定し、研究を進めたいと思います。

【SVコメント】

小倉啓子（ヤマザキ学園大学）

1. **研究の背景と目的**：本研究の目的は、「中高年期の女性が人生経験をどう自己の中に位置付けているか、これまでに培った力はどう変容してきたか、そしてその力をもとにどう生きようとしているのかを明らかにすること」です。このテーマは、長寿社会のなかで女性高齢者の一人暮らし期間の生き方、新しい状況への適応という重要な課題を考えるうえで、示唆を富む研究結果が期待されます。また、人生経験で培ってきた内的資源に着目したことは、生涯発達の視点からも重要なテーマであると考えます。
2. **M-GTA に適したテーマか**：今回の発表の時点では、分析テーマと分析焦点者の設定が不明確と思われますので、M-GTA に適したテーマかどうかは判断がつきにくいと思います。M-GTA を用いるのであれば、この2点を明確にする必要があるでしょう。
3. **分析テーマ・分析焦点者の絞り込み**：発表時の分析テーマは「中高年女性の人生経験から得た学びの変容のプロセス」です。分析焦点者の設定は「地域に在住し、入院や施設入所をしていない 50 歳から 64 歳までの女性で、抽出方法は機縁法で行う」、とあります。検討が必要な事項は、①「地域在住の 50 歳から 64 歳まで女性、機縁法で抽出」ということでは範囲が漠然としています。中高年女性とはどのような経験をした人々か、どのような状況にある人々かを明確にする必要があります。②人生経験は幅広く、学びといっても多様でしょう。これにも限定が必要と思われます。③どのような状態からどのような状況に変容したのか、明らかにしたい変化のプロセスを明確にする必要があります。分析テーマ自体は重要なテーマですので、どのような女性の経験や生き方やその変容、内的資源の蓄積と生かし方に関心があるのかを整理なさったら、と思います。「自己の中に位置付けているか、これまでに培った力はどう変容してきたか、そしてその力をもとにどう生きようとしているのかを明らかにしたい」とのことですから、今一度、何を、何のために明らかにしたいのか、という視点で検討されたいかと思いますが。
4. **インタビューガイド**：「文章完成法に基づいた調査票を用いる」というユニークな試みをされています。文章完成法による予備調査は、対象者の方々が事前に内省する機会に

なり、インタビュー時の質問にも応用できる点で有効と思います。確認しておいていただきたいことは、①本研究の目的のために、回答が全く自由な文章完成法を選択した理由、②文章完成法のなかで11の質問項目を選択した理由です。

【第2報告】

清水史恵（京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻）

Fumie Shimizu : Human Health Science Graduate School of Medicine at Kyoto University

「通常学校で医療的ケアを提供する看護師の役割の発展」（博士論文）

Role development of nurses who provide nursing care for children who are technology-dependent in mainstream schools

研究の背景

障害の有無に関わらず子どもたちが共に学ぶというインクルーシブ教育の考えに基づき、日本において、近年、障害のある子どもが、身近な場所において、子どもたちとともに教育を受けるための施策が示されてきている（内閣府, 2011; 文部科学省, 2011）。2012年の文部科学省の調査によると、通常学校で学ぶ医療的ケアを要する児童生徒は848名で前年度より168名の増加している（文部科学省, 2012）。日本において、医療的ケアを要する子どもが増加していることより（杉本他, 2008）、今後も、通常学校に通学する医療的ケアを要する子どもが増えることが予想される。本研究における医療的ケアとは、日常生活を送る上で必要な医療的な技術を要するケアであり、導尿、口鼻腔内吸引、気管内吸引、経管栄養、酸素吸入、人工呼吸器管理等を意味する（United States Congress, Office of Technology Assessment, 1987, p.3）。

日本の通常学校においては、医療的ケアを看護師が実施する体制が整えられていく方向にある（文部科学省, 2011）。2012年、全国で102の自治体の教育委員会が、医療的ケアを要する子どもに医療的ケアを提供するため、看護師を雇用していた（清水, in press）。それらの看護師の役割に関して、通常学校で医療的ケアを要する子どもを担任する教諭が、看護師に教育チームの一員として子どもたちの教育をサポートしてもらいたいと願っているという報告がある（Shimizu & Katsuda, in press）。また、医療的ケアを提供する看護師が、学校で医療的ケアを実施する看護師の役割が明確ではないと認識していることが報告されている（清水, 2011; 泊, 竹村, 道重, 古株, & 谷口, 2012）。近年、通常学校で医療的ケアを提供するための看護師の雇用が開始されたこと、看護師が医療面と教育面の役割期待を受けていることから、看護師に役割の曖昧さが生じていることが推測される。

Hardy and Conway (1988) は、役割の曖昧さを、「専門職に特徴的なものとして定義し、単に専門職の技術を試すだけでなく、役割を産み出す機会を提供するもの (p201)」と述べ

ている。役割の曖昧さを明確にすることは、役割の発展 (Oda, 1985)につながることを報告されている。役割の発展は、役割期待を人の能力やニーズやアイデンティティに合うように変化させるプロセスと定義され(Miller, Joseph, & Apker, 2000; Nicholson, 1984)、役割の明確化、役割の実践、役割の確立からなると言われている (Oda, 1985)。看護師の役割の発展について、通常学校で医療的ケアを提供する看護師を対象とした報告は少ない。

Simmons (2002)は、通常学校で働くスクールナースの職業上の自律を調査し、通常学校での経験が5年以上のスクールナースは、役割を明確化していたと報告している。また、役割を明確化するにあたり、看護師の役割や責任に関わる哲学を発展させていたと報告しているが (Simmons, 2002)、その過程の詳細は明らかではない。通常学校で働く看護師の専門職としてエンパワーメントする過程 (Broussard, 2007)、特別支援教育を行う学校において、特別な健康上のニーズのある子どものみをケアする看護師が、職にコミットし職に満足する過程 (Kruger et al, 2009)は明らかにされている。しかし、それらの過程の前段階である役割を明確化する過程は明らかではない。本研究の目的は、通常学校で医療的ケアを提供する看護師への有効なサポートの検討に役立てるため、通常学校で医療的ケアを提供する看護師が、人との相互作用を通し、医療的ケアを要する子どもに対する自身の役割を明確にする過程、つまり、医療的ケアを要する子どもへの必要な実践を見出す過程を明らかにすることである。

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

M-GTA は、ヒューマンサービス領域や社会的相互作用に関する研究、研究対象とする現象がプロセス的特性を持っているものに適しているという特徴がある (木下, 2003; 木下, 2007)。本研究は、人との相互作用により、看護師が、役割を明確にするプロセスを明らかにすること、理論構築を目的とすることから、分析方法として M-GTA を選択した。

2. 研究テーマ

通常学校で医療的ケアを提供する看護師の役割の発展

3. 分析テーマの絞り込み

分析テーマ	助言	改善事項
通常学校で医療的ケアを提供する看護師が子どもに対する自身の役割を見出し発展させているプロセス ⇒役割認識がどのように変化しているのかという視点で分析し、役	結果図について、全体的に抽象的すぎるということ、抽象的すぎることで、現場の看護師が結果を活かせないのではないか、臨床に結果を還元できるの	役割の発展の概念がどのようなものであるのかを先行研究で確認。 役割の発展の中の、役割の明確化に焦点を当て、どのように看護師が役割を明確化しているのかに焦点を当てることにした。

割の内容を示す概念も見出した。	か考えた方がよい。	
通常学校で医療的ケアを提供する看護師が子どもに対する自身の役割を明確にしていくプロセス	役割とは何か？明確化するとは、何がどうなっていくことか？分析結果がぼんやりしている。	役割の概念について再度見直した。役割は、values, attitudes, behaviors という側面からなる。役割を明確化するとは、期待されていることを理解し、それを自分が実践できる形で行動に示すこと、どんな実践を行う必要があるかを明らかにしていくことと考えた。
看護師が通常学校で医療的ケアを要する子どもへの必要な実践を見出すプロセス		

4. インタビューガイド (Table 1)

分析を進める過程で、インタビューガイドに、教育に関わることに対する思い、勤務する場の違いにより役割認識が異なるか、困難に感じた経験、実践が上手くいったと感じた経験に関する質問を加えた。

Table 1 Interview Guide

Topics	Examples
研究協力者の背景	通常学校での医療的ケアを要する子どものケアをする仕事を始めたきっかけや動機 通常学校で勤務する前に障害を持つ子どもと接した経験の有無
ケアの内容	実施しているケアの内容、どのように実施しているのか？医療的ケアを学校で実施する上で、配慮していることは何か？ 学校で医療的ケアを要する子どもをケアするにあたり、誰とどんな場面でどのように関わっているか？何を目的として、関わったのか？ 実施するケアの内容が変化したか？変化した場合、どのように変化したか？
看護師の役割	今現在、通常学校で医療的ケアを要する子どものケアする上で、看護師の役割をどのようにとらえているか？ 医療的ケアを要する子どもに関わる時期によって、看護師の役割のとらえ方が変化したか？変化した場合、どのような場面で、どのようなきっかけで、役割認識が変化したのか？ 自分自身の看護師としての役割についての迷いや葛藤などはないか？

	かったか？
仕事を通しての看護観・考え方の変化	通常学校で医療的ケアに関わる仕事をする中で、自身の看護観に変化はあったか？あれば、どのような変化か？

5. データの収集法と範囲

1) 研究対象者

日本の通常学校で医療的ケアを提供するために教育委員会に雇用された看護師とした。

研究開始当初、通常学校での1週間の勤務日数が3日以上、通常学校での看護師としての勤務経験が2年以上、教育委員会の雇用規定として特別支援教育支援員や養護教諭の業務を兼務しないという条件を満たす看護師を対象とした。看護師の勤務年数を2年以上としたのは、ベナーの看護論において、自分なりの看護実践を行い始める『一人前のレベル』が、同じ場で2～3年働いた看護師ということからである。

分析過程において、対象者の条件として、2年未満の経験の者やなるべく長期間の経験を有する者というように経験年数、定時もしくは常時必要とするかといった医療的ケアの内容、ケア対象の子どもの年齢に多様性を持たせ、勤務地に偏りがないように対象者を抽出した。

2) 研究協力者の概要 (n=26)

- ・全員女性 平均年齢 45.8 歳
- ・23名は、小学生の子育てを経験のうち2名は、障害児の子育てを経験
- ・北海道、本州、九州の12の市町に非正規職員として勤務
- ・全員 小学校で働いた経験有りのうち5名は、中学校で働いた経験も有り
- ・通常学校での経験 平均 4.7 年
- ・臨床経験は平均 11.8 年
- ・10名は、小児看護の臨床経験あり (平均 6.7 年)
- ・11名は、これまでに担当した医療的ケアを要する児童生徒数が1名
- ・通常学校で担当した医療的ケアを要する子どもたちは、複数のケアを必要
- ・医療的ケアの内容は、口鼻腔内吸引、気管内吸引、薬剤吸入、酸素吸入、人工呼吸器管理、経管栄養、導尿、膀胱ろうの管理、人工肛門管理、洗腸、排便、点滴管理

3) データ収集方法

プライバシーが確保できる場所で、看護師に、個別に半構成的インタビューを実施した(平均 71 分間)。インタビュー内容を、看護師の許可を得た上で録音し、匿名性を保持した形で逐語録とした。看護師1名については、録音の許可を得られず、インタビュー時ノートに筆記し、インタビュー後その日のうちに、内容を想起して文章化した。

6. 分析焦点者の設定

通常学校で医療的ケアを提供する看護師

7. 分析ワークシート 別紙 （当日配布回収資料）

8. カテゴリー生成（概念の比較）

6つの《カテゴリー》と19の＜概念＞が見出された。

例として、《共に学び育つ子どもの視点でみる》をあげる。

これは、看護師の見方が、医療の視点で体を見るのではなく、学校生活を送る子どもの視点で、子どもやその状況を見るようになることである。

・インタビューデータをもとに、概念の関連を考えた。

子どもを全体的に捉えることで、看護師の認識がどう変化したかを考えた。データから抽出した概念をみると、子どもの見方が変わったことを示すものと、自身の立ち位置の見方が変わったことを示すものがあると考えられた。

・子どもの見方が変わったことを示す概念間の関係から、カテゴリー名を考えた。

カテゴリー内の概念は、看護師は、子どもをみる視点が、医療という安全健康を保持するために子どもの体を見ることを重視する視点ではなく、学校生活を送り、周囲の子どもたちと共に学び育つ子どもとして子どもをみるという視点に変化していると考えられた。データから、概念間の関係を考え、カテゴリー名を《共に学び育つ子どもの視点でみる》とした。

9. 結果図 別紙 （当日配布回収資料）

10. ストーリーライン

勤務開始当初、看護師は、医療的ケアを要する子どもに対して、学校の時間サイクルに沿った医療的ケアの提供、先を見越した見守り、体調の見極めを行うというように、《医療の視点で体を見る》ことで、子どもに必要な実践を明らかにしていた。時間の経過と共に、子どもや親や教諭とコミュニケーションをはかり、学校社会の一員になり、子どもを我が子のように捉え、親の気持ちへと同化していき、《信頼関係を構築》していた。看護師は、学校の時間サイクルに沿って医療的ケアを提供する中で、教育的な関わりの実践をみる、教育に関する情報を得ることで、子どもへの《教育的な関わり方の学んで》いた。

看護師は、体調の見極めを行う中、学校や家庭での子どもの生活環境に目を向けていった。また、教育的な関わりを学ぶことで、子どもが持つ力、親子の学校生活への思いを理解していった。看護師は、親の気持ちへと同化することで、子どもの全体を知りたいと願い、将来を見据えて考え、《子どもを全体的に捉える》ようになっていった。

看護師は、子どもを全体的に捉えることで、障害があり、医療的ケアを必要としていても、子どもは健康であると認識し、子どもを特別視しないようになっていた。また、子どもの成長を感じ、看護師は、子ども同士学び育つことの大切さを意識していた。子どもの立場に立ち、《共に学び育つ子どもの視点で見る》ことで、子どもへの必要な実践が何かを考えるようになっていた。一方、看護師は、《子どもを全体的に捉える》ことで、学校は教育が中心となる場であると意識し、教諭が子どもに関わる軸であると気づき、ケアのベースは家庭であることを受け入れていった。その結果、看護師の力だけでは、子ども同士学び育つことが難しいと認識し、チームで取り組む必要性に気づき、《チームの一員として見る》ことで、子ども同士学び育つために、自分ができる実践は何かを考えるようになっていた。

11. 現象特性

通常学校で医療的ケアを提供する看護師は、子どもたちや教諭や親との関わりを通して、医療的ケアの提供以外にも、子どもに対して実践すべきことを見いだしていく。

12. 分析を振り返っての疑問点

- ・コアカテゴリーを見出していない。カテゴリーで結果を説明できる場合は、コアカテゴリーはなくてもよいということであるが、本当になくてもよいのか？見出すことができていないだけなのか？
- ・概念間の関係を考え、カテゴリーを見出したが、カテゴリーによっては、類似する概念を集めたものとなった（ex. 子どもを全体的に捉える）。カテゴリーの見出し方が誤っているのか？
- ・対極例をあげ、概念単位で理論的飽和に至っているのかどうか検討することが難しい。

13. 頂いたご意見

- ・結果図に動きが見えない。きれいにまとまってしまっている。看護師の行動が見えない。
- ・他領域の場に、一人で入り込むという現象が、どんな場合にあるのか考えてみるとよい。理論的センシティビティにつながる。
- ・研究協力者が、経験のある看護師だからこそ言えることは何かを考える。
- ・役割という曖昧な言葉を用いない方がよい。抽象的な言葉は、外側から現象を見てしまうことにつながる。
- ・明らかにしたいことは何か、一番関心のあるところは何か、そこを分析テーマとして挙げていくとよい。
- ・中心となる概念をまず考える。そこから、概念間の関係を考えていくとよい。
- ・相互作用を示す概念が少ない。結果図や、ストーリーラインにおいて、具体的な相互作用が見えない。

- ・研究協力者はこの分野の先駆者であり、結果は、モデルを提示することにつながるのではないか。

14. 研究会での発表による学び

研究に取り組む姿勢について、振り返ることができました。研究したいことを研究していたはずが、いつのまにか、研究しなければならない、論文としてまとめなければという思いが大きくなってしまっていたことに気づくことができました。「のびのびと」「窮屈さを感じる」等、コメントを頂き、自分が何を明らかにしたかったのか、原点に立ち返る機会になりました。

提示した分析ワークシートの概念について、「意識するには、そのきっかけがある。意識することでどう行動にうつすのか?」「その概念がないと、結果図が成り立たなくなる概念はどれか?」というコメントや問いを頂き、概念間の関係を考えていくヒントを得ることができました。看護師と勤務する中で関わる人々との相互作用、看護師の動きに着目し、データに戻って、分析をやり直そうと思います。

研究会において発表の貴重な機会を得、様々な先生方よりご意見いただき、大変感謝しています。また、スーパーバイズをご担当いただいた木下先生には、発表前の期間、メールにてご意見をいただき、当日も多くのご意見を頂き、大変有り難く思っています。当日配布し回収させていただいた資料に記載いただいたご意見を見て、とてもうれしく思いました。今回の発表の経験が無駄にしないよう、また、研究開始からこれまでにご協力いただいた方々の好意を無にすることがないよう、意義のある結果を見出せるよう努力します。ありがとうございました。

文献

- Benner, P. (1984). From novice to expert, excellence and power in clinical nursing practice. Menlo Park, CA: Addison-Wesley Publishing Company.
- Broussard, L. (2007). Empowerment in school nursing practice: a grounded theory approach. *Journal of school nursing*, 23(6), 322-328.
- 内閣府 (2011). 障害者基本法の一部を改正する法律概要. [Cited 14 May 2012.] URL: <http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonhou/pdf/gaiyo.pdf>
- Hardy, M. E., & Conway, M. E. (1988). *Role theory: Perspectives for health professionals* (2nd ed.). Norwalk, CT: Appleton & Lange.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- Kruger, B. J., Radjenovic, D., Toker, K. H., Comeaux, J. M. (2009). School nurses who only care for children with special needs: Working in a teacher's world. *Journal of school nursing*, 25(6), 436- 444. doi:

10.1177/1059840509349724.

Miller, K., Joseph, L., & Apker, J. (2000). Strategic ambiguity in the role development process. *Journal of Applied Communication Research*, 28(3), 193-214.

文部科学省 (2011). 特別支援学校等における医療的ケアへの今後の対応について. [Cited 14 May 2012.] URL:

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/087/houkoku/1314048.htm

文部科学省 (2012). 特別支援教育関係調査の結果等について. [Cited 29 Aug 2012.] URL:

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321571.html

Nicholson, N. (1984). A theory of Work Role Transitions. *Administrative science Quarterly*, 29(2), 172-191.

Oda, D. (1985). Community health nursing in innovative school health roles and programs. In *Community Health Nursing 3rd edn* (Archer S & Fleschman R eds), Wadsworth, Monterey.

清水史恵 (2011). 通常学校において医療的ケアを要する子どもをケアする看護師が認識している教諭との協働. *日本小児看護学会誌*, 20(1), 55-61.

Shimizu, F. & Katsuda, H. (in press). Teachers' Perceptions of the Role of Nurses: Caring for Children Who Are Technology-Dependent in Mainstream Schools. *Japan journal of nursing science*.

清水史恵 (in press). 通常学校において医療的ケアに関わる看護師の配置や雇用状況の全国調査—教育委員会を対象として—. *日本小児保健学会誌*.

Simmons, D. R. (2002). Autonomy in practice: a qualitative study of school nurses' perceptions. *Journal of school nursing*, 18(2), 87-94.

杉本健郎, 河原直人, 田中英高他 (2008). 超重症心身障害児の医療的ケアの現状と問題点 : 全国 8 府県のアナケート調査. *日本小児科学会雑誌*, 112(1), 94-101.

泊祐子, 竹村淳子, 道重文子他 (2012). 医療的ケアを担う看護師が特別支援学校で活動する困難と課題. *大阪医科大学看護研究雑誌*, 2, 40-50.

United States Congress, Office of Technology Assessment. (1987). *Technology-dependent children: Hospital v. home care—A technical memorandum, OTA-TM-H-38*. Washington, DC: US Government Printing Office.

【SVコメント】

木下 康仁 (立教大学)

・通常学校において医療的ケアに従事している看護師の日常実践を明らかにしようとする研究で、現在のそうした子供の数は全国的に見ても少ないが今後増加が予想されており、本研究はこの課題についての先駆的研究であり、さまざまな形で成果が今後活かされていくと期待される。清水さんの分析は堅実なスタイルだが、ちょっと安全運転すぎるように感じられた。未知の事柄を自分が見出していくことへの予感というか、発想をのびのびさせると、ぐっとおもしろくなるはずです。

・分析テーマの中の「役割」の扱いについては研究会前のやりとりでも指摘したが、分析テーマに入れる言葉としては扱いきれていないと感じた。先行研究からの援用度が高く、自分が使いこなせる言葉になっていないため、データの解釈を硬くしている。役研究会ではこの点を修正し、分析焦点者の視点からデータを解釈していきやすくなっていた。分析テーマによって自分がこのデータから何を明らかにしようとするのかが設定されるので、平易な言葉で表現することが大事である。

・医療専門職が非医療的場で専門職として働いているという構成を、どう理解するか。誰に、何をするのかがあいまいな状況だとすれば、そこでの看護師の日常行動、活動を詳細に理解していく必要がある。位置づけが曖昧な状況で、さまざまなことをしているのであり、その現状が具体的に捉えられる概念化が必要で、一でないと、現場のリアリティが理解されにくいまま結果の提示になってしまいやすい。看護師はその状況の中で安定した活動世界を創り上げているとすればそのプロセスが明らかにされる意義は大きい。本来の医療的関わりが何であり、非医療的関わりがなんであるのか、また、担当児童生徒との関係にしても代弁、対立し、抑制など、一様ではないだろう。医療目的と非医療目的とが対立することもあるのではないか。そのとき看護師はどう判断するのか。自身の看護／師観は、ここでの経験によりどのように変化していくのか、等々、いろいろと疑問がでてくる。分析テーマと分析焦点者に集中して解釈すればみえてくるでしょう。

・社会的相互作用の相手も当該児童、生徒だけでなく、周りの学友、担任教員、他の教員、養護教員、事務職員、当該児童生徒の家族、他の家族、等々、が考えられる。どのようなやり取りを分析焦点者を行っているのか。

・結果図はきれいにまとまりすぎていて、分析焦点者のうごきが浮かんでこない。さまざまな葛藤、疑問や不安、確信、などを経験しながら安定した日常的活動の世界を作り上げているプロセスが漠然としているため、この結果が単に自分の解釈をまとめたものだけでなく、誰に対して、どのように活用可能なのかについても考えなくてはならない。

【第3報告】

伊藤由美子（南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻）

Yumiko Ito: Nanzan University Graduate School of Humanities Program in Educational Facilitation

「聴覚障害者と健聴者の関係性の一考察

—— 難聴者の学校から職場への移行期プロセスを M-GTA で分析検討」

A study of relationship between people with hearing disabilities and people with normal hearing —— Analyze and investigate of transitional period from school to work of people with hearing disabilities by the Modified Grounded Theory Approach

研究の背景

近年、日本における聴覚障害児・者教育は多様化している。しかし、それらを大きく二つに分けると、一つは聾学校を基本とする分離教育、もう一つは地域の学校を基本とする統合教育（注 1）である。年々聾学校在籍者数が減少の一途を辿る反面、地域の学校に通う聴覚障害児・者は増加している。

筆者は、平成 18 年、19 年、20 年と 3 年間、聾学校で通級による指導（注 2）の担当になった。通級による指導を受ける児童は中等度難聴（人工内耳装用児も含む）で、コミュニケーション手段は音声言語を使用している。通級による指導を受ける児童は地元の小学校に在籍し、週 1 回（2 時間）聾学校の通級による指導を受ける。筆者は年 1, 2 回在籍学校を訪問し、授業参観後、難聴理解授業を実施した。それにより多くの在籍校で、難聴児への話しかけ方やかかわり方の改善がみられるようになった。しかし、学級児童が嬉々として楽しんでいる休み時間に通級による指導を受ける児童は一人で過ごすことが多く、或いは学級児童が周囲に居てもかかわりをもてないでいる児童がみられた。このことは、騒音下での複数の会話が聴覚障害児にとって大変困難であることに起因していると考えられる。また学級活動においても、難聴児童は情報を全部把握することが困難なため、誤行動を繰り返すうちに自信を失い、学級児童の様子を模倣することが常態化している児童もみられた。

その後、筆者は平成 21 年、22 年、23 年の 3 年間、小学校併設の通級による指導を担当した。学級児童は難聴児が入学当初からクラスに在籍しているため、特別視する様子はみられなかった。しかし、小学校中学年から高学年にかけて、女子に多くみられるチャムグループができると、複数でのコミュニケーションが困難な難聴児は、「曖昧な世界に曖昧な状態にいる」存在に悩むことが多くなった。そこで難聴理解授業を実施したり、生活場面でのきき取り難さを表した絵を掲示したりして、健聴児に難聴児のきき取り難さを理解してもらうようにした。しかし、音声言語のみのコミュニケーションに慣れている健聴児に、学校生活の多くの場面で難聴児への配慮を期待することは難しいと考える。また聾学校教育を経験した難聴児に比べ、小学校より地域の学校に在籍している難聴児は特別視されることに大変消極的である。そのため全校集会など、きき取りが困難な状況で通級担当者が視覚的情報を提供しても無視する態度がみられた。健聴児との関係性を考える上で、学校環境改善や難聴（児）理解のみの難聴理解授業は一方的な関係を推し進めることにならないのではないか。学校環境が改善されることと並行して、「自分が困っている時は助けてもらおう、困っている人がいたら助けてあげよう」と、障害の有無を超え、双方向の関係性がもてるように授業内容を切り替えた。現在、多くの聾学校では手話、口話、発音サイン、

文字、絵などを駆使して一人ひとりのニーズに合った情報保障をしている。分離教育では情報保障は至極当然のこととして行われている反面、統合教育では多くの場合、難聴児・者は不十分な聴覚的情報の中で状況判断して行動している。

日本には、聴覚・視覚障害者を対象とする我が国唯一の高等教育機関として筑波技術大学がある。筑波技術大学は、聴覚・視覚障害者の社会自立、参画、貢献の促進を目標に、率先して社会に貢献できる専門職業人を養成することを基本目標としている。石原（2009）は筑波技術短期大学（筑波技術大学の前身）聴覚障害系卒業生の転職に関する調査結果と、労働行政機関が実施した「若年者の離職理由と職場定着に関する調査」の結果を比較した。聴覚障害系卒業生の離職率は一般労働者と比較してもそれほど高くないとしている。転職を具体的に考えた時期は入社後3年目以降が多く、理由は「自分のキャリアや将来性」「障害に対する配慮」「仕事の内容」「職場や人間関係」が上位を占めているとしている。「自分のキャリアや将来性」が上位にあるのは、筑波技術大学が聴覚障害学生を対象とした専門職業人養成に重点を置いている大学であることによると考えられる。

学校から社会への移行期はまさに成人になる時期に当たり、人生周期上大きな転換期とされている（山本・ワップナー1991）。それゆえ、常に不完全な聴覚的情報の中で十分にコミュニケーションを取れない状況で生活してきた聴覚障害者は、学生から社会人としての役割移行期にどのようなプロセスを経て、職場に適応しているのか、或いは転職を考えたのか、職場の人間関係や障害に対する配慮をリサーチクエスチョンとしてインタビュー・分析をしたいと考えた。

（注1）ここに掲げた統合教育とは、「分離教育」の対概念として用いた。

（注2）「通級による指導とは、小学校又は中学校で通常の学級に在籍している児童生徒に対して、主として各教科等の指導を通常の学級で行いながら、障害に応じた特別の指導を特別の指導の場で行う指導形態です」（学校教育法施行規則第140条及び同施行規則第141条）

研究目的と意義

1) 目的

本研究の目的は、大学卒業後入社約4年目以降の難聴者へのインタビューを通して就職直後から現在（インタビュー当日）に至るまでどんなことを体験したのか（しているのか）職場への移行プロセスを明らかにし、健聴者との関係性を検討することである。若松（1995）は「就職を期に、学生の社会から労働者・被雇用者の社会への劇的な移行を求められるということから、初期適応における多くの困難が生じているように思われる」と述べている。さらに「適応の要因を明らかにするためには、就職前と就職後のどちらにも目を向けて行く必要があるだろう」としている。従って、研究の始点を就職直後としたが、大学で就職を考え始める就職前にも目を向けて行きたいと考える。本研究では、健常者の大学卒業生と筑波技術大学（聴覚・視覚障害者を対象とする我が国唯一の高等期間）卒業生の先行研究レビューを行い、一般大学を卒業した難聴者の就職直後から職場への適応に向かう移行プロセスを明らかにしたいと考える。

難聴者は各校に1人或いは少人数で学校教育を受け、難聴者団体（青年部）に所属している人も少なく（一部地域を除く）、研究対象者を探すことに難航した。各地域の難聴者団体に連絡を取り、青年部活動をしている地域や難聴者団体の集会に研究者自身が参加し直接交渉して協力を仰いだ。

2) 意義

他者との関係にはさまざまな文脈が考えられるが、必然的にポジティブ・ネガティブな関係を経験することになる。永田（2008）は「学校から職場への移行では社会から『役割の変化』が大きな問題となる」としている。榊原（2000）は卒業後3年以内の卒業生を調査し、転職そのものはまだ少ないが、会社への適応で困難を抱えている者の多いことを指摘している。また、若松（1995）は必ずしも転職は否定的意味をもつものではないが、適応できる進路を最初から選べるのであれば望ましいと述べている。

「適応」という概念について、若松（1995）は「職務満足」「組織的コミットメント」とし、就職者が職場をどのように感じているか、評価しているかと一方向の視点に立っている。そして若松（1995）は、適応の過程は不適応から適応という方向だけでなく、その逆の方向も十分ありうる動的なものであるとしている。それに対して菊池（1991）の定義は、「職場が彼を必要とし、ある役割を期待し、彼自身にとってもそれに應えるのが満足である状態」と、就職者とその受け入れ側の双方を考慮している。

本研究では、「適応」を「障害に対する配慮があり、職場から必要とされ、難聴者にとっても課せられた役割に應えるのが満足である状態」と定義する。

コミュニケーションの問題（音声言語を話すが複数の会話をきき取れない）を抱える難聴者は職場の人間関係や職務遂行上で、どのような葛藤や危機を経験し、不適応から適応へと至るのか、あるいは適応から不適応に至るのか大学で就職を考え始めて社会人への移行プロセスを当事者へのインタビューを通して明らかにしたいと考える。特に本研究では一般大学を卒業した難聴者を対象者にすることで、各職場で一人或いは少人数在職する難聴者がM-GTAで提示された理論を、自分の置かれている状況に取り入れながら修正を施しつつ応用し、実践に活かしていくことができると考える。

3) 聴覚障害（者） 難聴（者） ろう（者）

○「聴覚障害」とはどのような障害か

一般に聴覚機構に何らかの障害が起こり、聴こえの機能が低下している状態を聴覚障害としているが、その基準は必ずしも明確ではない。

・WHO 国際障害分類

全ろう（音を増幅しても利用できない程度）、最重度聴力障害（91デシベル以上）、重度聴力障害（71～90デシベル）、準重度聴力障害（56～70デシベル）、中等度聴力障害（41～55デシベル）、軽度聴力障害（26～40デシベル）——正常聴力0デシベル

・医学モデル

平均聴力レベルで正常は25デシベル以内、軽度難聴（26～39デシベル）、中等度難聴

(40～69 デシベル)、高度難聴 (70 デシベル以上)

※WHO 基準は 41 デシベル以上の人は補聴器装用必要としている。しかしわが国の場合、医学モデルを採用し両耳聴力 70 デシベル以上 (あるいは、片耳聴力 90 デシベル以上、もう片方の聴力 50 デシベル以上) を聴覚障害者と規定している。70 デシベル以上であれば聴覚障害者として認定され、身体障害者手帳が交付される。

○「聴覚障害者」とは

一般に聴力損失時期や残存聴力により、ろう者、難聴者、中途失聴者、に分けられる。

- ・「ろう者」とは、音声言語獲得以前、あるいは獲得後であっても、幼少時に失聴した人たちである。主要なコミュニケーション手段は手話である。
- ・「難聴者」とは、ある程度残存聴力があり、補聴器 (人工内耳を含む) を装用して音声言語の識別がある条件の基で可能な人たちである。音声言語を通常のコミュニケーション手段としている。

難聴は伝音難聴 (外耳から中耳の障害)、感音難聴 (内耳から聴神経、脳にかけての障害)、混合難聴 (伝音難聴と感音難聴にまたがる) に分かれ、従って一人ひとりきこえ方は異なる。聴力と語音明瞭度検査により障害者手帳を交付され補聴器装用している人、交付されないため補聴器を自費購入している人、補聴器装用していない人様々である。また高齢により聴力が衰えた老人性難聴も含まれる。

- ・「中途失聴者」とは、音声言語取得後、高学年、あるいは社会人になってから聴力を失った人たちである。

※聴覚障害者といっても難聴者、中途失聴者、ろう者と分けて述べることはあるが、WHO の考え方、医学モデル、教育現場、当事者の考え方など、それぞれ異なり、はっきりと決められていない。

※しかし、ろう者、難聴者、中途失聴者と自己表明しても障害者手帳の記載が「〇〇難聴者」となっている人が多く、難聴者というカテゴリーはかなりあいまいである。

○本研究では障害について全般的に述べる場合は「聴覚障害 (者)」と表記し、研究対象者に関しては音声言語を主としてコミュニケーション手段としている難聴者と限定しているため、「難聴 (者)」と分けて表記する。

1. M-GTA に適した研究であるか

M-GTA はデータの切片化を行わず、面接データに基づいて概念生成するため、当事者の意識や行動の変容プロセスを明らかにすることができる。

○ 社会的相互作用

「話せるけど、ききとれない」難聴者が健聴者の職場で仕事をする上で、意思・感情・思考を伝え合うコミュニケーションは欠かせない。健聴者同士のコミュニケーションより伝わり難い状況にある。そこでの難聴者と健聴者の社会的相互作用のプロセスを明らかにすることが本研究の目的である。

○ プロセス的性格

就職を考え始めてから就職後約4年目以降の20代30代の難聴者を研究対象とすることで、人間の行動の変化と多様性を一定程度説明できる。その現象がプロセス的性格をもっている。

○ 理論生成・応用

各職場で一人或いは少人数在職する聴覚的情報が把握しにくい難聴者がM-GTAで提示された理論を、自分の置かれている状況に取り入れながら修正を施しつつ応用し、実践に活かしていくことができる考える。

2. 分析テーマへの絞込み

研究協力者のインタビュー・データから健聴者との関係性をどのように構築していけばよいか試行錯誤している段階であると考えた。そこで、分析テーマを「難聴者が健聴者との関係性構築試行プロセスの研究」とした。しかし、更にデータを読み込むと、「関係性の構築」というより健聴者との社会的相互作用を通して一進一退しながら職場に適応していくプロセスがみられた。また実際の研究協力者は、20代、30代と年齢差や一人ひとりの聞こえ方や経歴が異なり、研究期間を年数で区切ると、分析対象者の“集団”としてのプロセスが捉えにくくなると考え、分析の始点を就職直後（大学で就職を考え始めた時を含む）、分析終点を適応へと向かっている段階とし、

分析テーマを「難聴者が職場で一進一退しながら適応へと向かうプロセスの研究」とした。

3. インタビューガイド

○録音の許可 ○同意書に添って、研究目的等の概要を伝える

○質問項目

- ・就職を考え始めた時から想起して、職場に入った時(就職直後)どんな体験をしたか。
- ・現在に至るまでの経緯
- ・現在、どのような仕事をしているのか。(その仕事を選択した詳しい経緯)
- ・仕事で満足している点はどのようなことか。また、不満を感じる点はどのようなことか。
- ・仕事上の悩みや困りごとを誰に相談しているか。職場でサポートしてくれる人はいるか。
- ・職場の人とのコミュニケーションはどのようにしているのか。
- ・職場では、障害に対するサポートはあるのか。ある場合は具体的に。無い場合はどのような時に困っているのか。
- ・自分自身の強み（長所）
- ・職場での障害理解について考えていることはあるのか。
- ・これから就職する難聴者へのアドバイスはあるのか。具体的に教えてほしい。
- ・インタビュー全体を振り返っての感想等。

4. データの範囲と収集法

①データの範囲

一般大学卒業者の31.0%が3年以内に離職している「厚生労働省（2010）」。筑波技術短期大学（筑波技術大学）の調査によると、転職を具体的に考える時期は入社後3年目以降が多いとしている。「筑波技術大学テクノレポート Vol.17(1)2009」

以上のことから研究当初、職場での困難や葛藤を経た大学卒業後約4年目の難聴者を対象とした。しかし通常の学校教育を受けた難聴者は難聴者団体の青年部に所属する人は僅少で、協力者探しは難航を極めた。研究者自ら各地域の難聴者集会に参加し、個人的に交渉し20代女性—3名、30代女性—3名、30代男性—3名の、主として音声言語を使用し、現在就労している難聴者に依頼することができた。

②収集法

期間：大学倫理審査委員会の承認後（2013年6月末）、2013年7月から2014年1月まで（3月に1名予定）。ベース・データとして集中的にインタビューを実施したいと考えたが、協力者探しは難航した。積極的にインタビューに協力していただける方は対象外（入社2年目—1名）でも実施した。

対象者には事前にアンケート（属性、コミュニケーション方法）を依頼した。面接日時や場所については対象者と連絡を取り合い決定し、1時間から1時間半位の半構造化面接を実施した。録音許可を得てICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。

5. 分析焦点者の設定

大学卒業後約4年目以降の主として音声言語を使用し、（転職可）現在就労している20代30代の難聴者

6. 分析ワークシート（別紙・回収）

7. カテゴリー生成（現時点）

現在のところ、16概念（内2サブ概念）作成。以下概念を〔 〕、カテゴリーを【 】と表記する。

1概念作成毎に類似と対極の2方向で比較検討し、新たな視点を得てアイデアが生まれた。概念間の関係を考えながらカテゴリーを考えた。

研究の始点は入社直後であるが、学生時代の障害に関するサブ概念〔情報保障の自己手配〕、〔受容できなかった難聴という障害〕を付加した。（これは研究者独自の判断です。）

入社直後の〔難聴ゆえの初期ショック〕、〔一人きりの不安〕、〔仕事に響く電話対応〕を不安を増殖する状態としてカテゴリー【孤独と閉塞感】で括った。次に健聴者との関係でどうしても乗り越えられない壁があり、ぎりぎりに追い詰められた状態〔我慢の限界〕、〔理解されない聴覚障害という障害〕、〔払拭できない壁〕を近接関係とし、【払拭できない壁】をカテゴリーに移動した。また難聴者の転機をあらわす〔後悔しない退職への決断〕、〔アグレッシブな再就職活動〕をカテゴリー【活かされる場へ邁進】で括った。そして健聴者からの関わりがみられる〔職場の助け舟〕、〔難聴理解の芽生え〕をカテゴリー【差しのべられた手】で括った。そして難聴者が健聴者へ働きかける〔健聴者にアピール〕、〔伝えたい不可欠な視覚的情報〕をカテゴリー【必要な伝える力】とし、難聴者は健聴者と向き合

い、適応へと向かう〔モチベーションの芽生え〕、〔一任される仕事〕をカテゴリー【活かされる自分】とした。

8. 結果図（現時点一別紙・回収）

9. ストーリーライン（現時点）

本研究で明らかにしたいのは、難聴者が職場で一進一退しながら適応に向かうプロセスである。結果図から大きく二つの関係がみえてきた。一つは「難聴者と内面的自己の関係（自分自身と向き合う）」、もう一つは「難聴者と健聴者の関係（向き合い関わる）」。難聴者は内面的自己と向き合い、一進一退を繰り返しながら健聴者と向き合うプロセスである。

分析の始点を入社直後としたが、プロセスをみる場合それ以前の状況も含めて考えることが必要だと考えサブ概念として、〈受容できなかった難聴という障害〉、〈情報保障の自己手配〉を付加した。これは入社以前の異なる状況の難聴者を表している。障害を隠して修学期（小学校から大学まで）を過ごし、就職後、必要に迫られて障害受容に至る〈受容できなかった難聴という障害〉、大学で手話通訳者や要約筆記者を積極的に探し支援を受ける〈情報保障の自己手配〉と二つのケースがみられた。次のプロセスのカテゴリー【孤独と閉塞感】では2つのケースの相違はみられなかったので、サブ概念として付加するのみとした。

難聴者は就職直後、周囲は健聴者ばかりで分からないことが連続して〔1人きりの不安〕に陥る。会社では手話通訳を手配すれば理解できるであろうと考えるが、専門用語や未知の言葉を指文字（注）で表されても理解することは難しい。要約筆記してくれる人もいるが、グループでの会話となると参加者として加わるので要約筆記は不可能になり、話されていることがさっぱり分からない。職場では忙しくない時はゆっくり話してくれる時もあるが、忙しいと早口、歩きながら話されると分からない。（難聴者にとって口形は大切なコミュニケーションの手掛かりとなる）話し方、見づらい口形、複数の会話・会議等で入社直後は難聴者にとって分からないことが連鎖し〔難聴ゆえの初期ショック〕を受ける。しかし、何といても多くの難聴者を悩ますものは〔仕事に響く電話対応〕である。電話をとっても誰にかかってきたのか、どんな要件なのか聞き取れない。電話の度に逃げ出したい気持ちになる。カテゴリー【孤独と閉塞感】では健聴者の情報保障の手助けはあるが、それ以上に分からないことがある。その状態が継続し、音声言語を話す騒音下、複数の会話聞きとれない〔理解されない聴覚障害という障害〕に悩み、葛藤を繰り返し、精一杯頑張りつづけたが、これ以上は〔我慢の限界〕である。ここで健聴者との関係を【払拭できない壁】とした。入社直後から約数年間、葛藤や苦悩の中で経験したことは難聴者に一種の強さをもたらした。それは転職後に「前の経験があったから強くなれた」「前の会社はとても大変だったけど、その苦勞があったから頑張れる」の語りに表れている。〔後悔しない決断〕は〔アグレッシブな再就職活動〕を促した。ここを難聴者と健聴者の関係性の切り替え点としてコアカテゴリー【活かされる場への邁進】とした。そして【差しのべられる手】では、傍で支えてくれる上司や同僚の〔助け舟〕、健聴者の話し方の変化、要約筆

記など職場の〔難聴理解の芽生え〕で健聴者からのかかわりにより、仕事に意欲的になり〔モチベーションの芽生え〕、その姿勢を後押しするように〔一任される仕事〕を与えられ【活かされる自分】を意識する。そして難聴者自身がもつべき【必要な伝える力】として社内手話講座、社内研修等で〔健聴者にアピール〕する機会を得て、〔伝えたい不可欠な視覚的情報〕を発信していく。一任される仕事と難聴理解が相乗効果となり、職場に適応へと向かうプロセスがみられた。

（注）手の形を書記言語の文字に対応させた視覚言語の一要素である。手話単語に無い単語は一字一字指文字で綴って表現する。

10. 現象特性

関わりがもてない閉塞感から脱皮し、自分自身が活かされる場を見出していく現象。

その現象は英語を話せないたった一人の英語圏の留学生が、その地の文化に溶け込む一方、自国の文化に誇りをもちアピールしていく場合や、DVの夫から逃延び、強く生きていく女性などが考えられる。

11. 理論的メモ・ノート

- ・インタビューでの協力者の印象や気づきをインタビュー直後にメモ書きし、インタビューの反省や振り返りをした。

- ・分析テーマ、現象特性など試行錯誤して修正した経緯を記述した。

- ・概念生成後、概念と概念の関係やカテゴリーを考え、アイデアやひらめきをメモ書きした。

- ・関東地区・近畿地区の難聴者の集い（4回）に参加し、当事者の語りをメモ書きした。今後、バリエーションとして分析に活かしていきたいと考える。

〈参考・引用文献一部掲載〉

木下康仁（2007）. ライブ講義 M-GTA——実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂

木下康仁（2003）. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い 弘文堂

木下康仁（編著）（2005）. 分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ 弘文堂

菊池章夫（2001）. 役割 齋藤耕二・本田時雄（編）ライフコースの心理学 6 金子書房 pp149-155

若松養亮（1995）. 大卒就職者の初期適応過程に関する要因探索的研究～本学部卒業生の事例データからの考察～ 東北大学教育学部研究年報 第43集

永田昭子・岡本祐子（2008）. 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴——信頼感およびアイデンティティとの関連—— 教育心理学研究, 56, pp149-159

榊原清則（2000）. 大学卒業生の就職と会社への初期適応過程／新構想キャンパスの卒業生動向調査 日本労働研究雑誌

山本多喜司・S.ワップナー（1991）. 人生移行の発達心理学 北大路書房

石原保志・木村戦太郎・中澤則雄・萩田秋雄・安東孝治・山崎勇・及川力・内野權次・内藤一郎・西岡知之・沖吉和祐（2001）. 聴覚部学生及び卒業生に対する職場適応のための指導及び支援に関する研究——

【発表を終えて】

・概念生成に関して

データの豊かな 1 人目の概念生成で、一つひとつの概念が定義やバリエーションを的確に表すものになっているのかどうか考え込んでしまい、昨年末よりなかなか前に進めない状態であった。

今回の中間発表は自分にプレッシャーを与えるために敢えて応募した。発表する以上は発表要綱に沿ってまとめなければならない。レジュメ作成途中に SV（坂本先生）より具体的なアドバイスを受け、現時点でのストーリーラインまで何とか筆記することができた。漠然としたものであるが、自分の研究の全容が見え、二つの関係「難聴者が内面的自己と向き合う」「難聴者と健聴者が向き合い関わり合う」がみえたことは大きな収穫であった。SV も難聴者が自分と向き合いながら認識を変え、相互作用を通してどのような具体的な行動を起こしたのか、コア概念も含めて検討していくようにと言われ、今後の分析の方向性をみつけることができた。

また研究者個人の考えで入社前の難聴者の教育背景をサブ概念として設定したが、SV よりその教育背景が入社直後やアグレッシブな再就職活動につながっていないかと指摘され、分析の始点を入社前において検討する必要性に気づいた。

さらに小倉先生もコメントされたように難聴者の状況は一人ひとり異なり、非常に繊細なものである。その繊細さが概念に表れていないことを痛感した。

・転職に関して

研究対象者の転職は、社会的背景や精神的に追い詰められたぎりぎりの状態で決断している。今回、データの上辺部分のプロセスから結果図を書き表したことで、転職が契機となり対象者に変容が起きたように結果図に表れた。SV やフローの方から指摘されたように転職することが適応へのプロセスではない。データの微妙な部分に着眼し、概念を検討し直すことをしていきたい。

今回、中間発表の場を得て SV の坂本先生や研究会の先生、フローの方から温かいご意見、ご感想をいただき、大変大きな学びを得ることができた。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

今後、今回の学びを活かし更に研究を深めていきたいと考えている。

【SVコメント】

坂本智代枝（大正大学）

我が国の多様化している聴覚障害児・者教育において、就労へと移行する際の貴重な研究となる意義のある研究であると考えます。

全体的な SV では、M-GTA について熟知される努力をされている印象を持ちました。発表された内容を踏まえて、データをさらに読み込んでいければ、より良い知見が得られると期待しております。また成果を定例会にて発表していただきたいと思います。

そこで、事前の SV の経過も踏まえ、SV を通して以下の 4 点コメントさせていただきます。

①データの収集法と範囲について

事前の SV の中で、関東地区、近畿地区で開催された難聴者集会に計 4 回参加し、難聴者の方々の語りをメモ書きしたものがある。それらのメモ書きを何らかのかたちでデータとして取り入れたいと考えているが、どのように取り扱えばよいのかについて、質問がありました。インフォーマントのリクルートにおいて、集会に足を運び努力されている貴重なデータですので、データの一部として取り扱ってよいと考えます。

②分析テーマの絞込みについて

分析テーマの設定は、データを熟読していく中で、どんな「うごき」を明らかにしたいのかということをまず考える必要があります。そのような中、データを読む前と読み込んだ後では、データに密着した理論ならではの分析テーマの修正をされているプロセスが見えていたと考えました。現時点の分析テーマは「難聴者が職場で一進一退しながら適応へと向かうプロセスの研究」ということで、「一進一退」とはどのようなプロセスを辿るのか、明確になるとおもしろいと思いました。

③分析焦点者の設定について

分析焦点者とは研究協力者と同義ではなく、分析テーマに沿って分析焦点者の設定が必要になります。事前の SV のやりとりでも確認しましたが、「職場での困難や葛藤を経た大学卒業後約 4 年目の難聴者」ということですが、「転職している経験はあるものの、現在は就労を継続している」と分析焦点者を設定したほうが良いとアドバイスさせていただきました。その内容のほうが、分析テーマに沿うのではないかと考えます。

④分析ワークシートについて

もっともデータの中でおもしろいと思った中心的な概念を検討するところから分析検討されるとよいと思います。それが限りなくコア概念になっていくと考えます。

事前の SV で、カテゴリーは、概念間の関係を同時にみながら考えていく（カテゴリーが浮かんでくる）と本や研究報告で述べられているが、カテゴリーが浮かびにくいのはなぜかという質問がありました。最初は、なかなか浮かびにくいものかもしれません。そこで、ワークシートの「理論的メモ」の欄に気付いたことやイメージしたことを書いておくとういいます。さらに、一つ概念を作成したら、データを読んで関係しているデータや

対極なデータ(対極例)を探してみてください。そうすると少し矢印等の関係図が描けて、ひとつのまとまりになると考えます。

しかし、木下先生の定例会のコメントにもあったように、すぐには難しく最初は「概念」が数多くできるかもしれませんが、作成する中で統合したり精査して整理していくと良いと思います。何度もデータを読んでいく中で、「ひらめき」が浮かびあがる時は本当にわくわくした経験となると考えます。

【第4報告】

宮城島恭子（浜松医科大学医学部看護学科）

Kyoko Miyagishima : Faculty of Nursing, Hamamatsu University School of Medicine

「小児がん経験者が病気を抱える自己に向き合う過程とその影響要因」

The process of childhood cancer survivors facing themselves with disease and its related factors

1. 研究の背景・目的・意義（配布資料より一部抜粋）

小児がんの治癒率向上に伴い、長期生存者は増加しており若年成人の 930 人に 1 人が小児がん経験者であるといわれており（前田, 2008）、成長・発達に伴って、自分の病気や自己についての理解を深め、再発の不安や晩期合併症の治療・健康管理を抱えながらも、社会生活を充実させることが重要な課題となってくる。晩期合併症は内分泌系、皮膚、循環、呼吸器、視・聴覚系など多岐にわたる身体的問題のほか、PTSD のような心理的問題、教育・就職等の社会生活への影響、心理・社会的な成熟も含めて捉えられてきている（大園, 2007）。看護師も他職種と協働して小児がん経験者の長期フォローアップを担っていく必要がある。

成人した小児がん経験者も多くが、小児科医による長期フォローアップ外来を含めて小児医療を受けている現状があり、成人医療への移行支援が行われているところは少ない。看護師は、入院中、がんと闘病する子どもを心身ともに直接支える役割を担い発達を考慮した援助も行っているが、退院後の関わりは少なく、生命や生活を脅かし強度の苦痛を伴うがんの闘病とその克服による子どもへの長期的影響の理解は十分ではないと考えられる。小児病棟や小児科外来の看護師は、現在の子どもの発達段階に応じた援助および、子どもの発達を見越した支援、そして現状では小児期からの疾患をもちながら成人した患者さんへの援助も行っていく立場にあるため、発達過程の中での病気の受け止め方など長期的視点から患者を理解する必要がある。

小児がん患者・経験者の視点からの研究は徐々に増えてきているが、発症後 5 年以上経過し思春期を経て成人に至った小児がん経験者の病気との向き合い方について発達過程を踏

まえた研究は少なく、2～6 事例の対象者のライフ・ストーリーをまとめたものなど個人の体験に焦点を当てたもの（牧野，2010；益子，2011）や、セルフヘルプ・グループに所属する人を対象にしたもの（牧野，2010；益子，2011；望月，2012）に限られているため、プロセスの把握や応用に限界がある。

小児がん罹患は健康や社会適応・自己概念を脅かすが、小児がん経験者がそれらを克服したりあるいは長期に健康問題を抱えながらも、他者との関係性の中で、病気および自己に向き合い、社会適応やアイデンティティの確立を遂げていく過程を明らかにすることで、長期的視点を持ち他職種と協働で小児がん患者・経験者を支えるための看護援助の示唆が得られると考え、本研究に着手する。特に、入院中に子どもの心身のケアを中心に行うが、退院後は子どもとの関わりがほとんどない小児がん患者が入院している病棟の看護師や、入院中の辛い闘病の時期には関わらないが外来で定期的に関わる看護師が、小児がん経験者の体験を、闘病から生活を再構築しつつ発達していくプロセスとして捉え、小児がん患者が闘病を乗り越えること、その後の闘病体験の意味づけや自分との向き合い方を予測しながら、闘病・通院中の援助を行うことに活かせると考えている。

そこで、本研究では、セルフヘルプ・グループに所属しない人も含めて（所属の有無にかかわらず）、発症後 5 年以上経過し思春期を経て成人した小児がん経験者が、病気を抱える自己に向き合う過程とその影響要因を明らかにすることを目的とする。

2. M-GTA に適した研究であるか

本研究は、小児がん経験者の主観的視点から、小児がん経験者の病気を抱える自己への向き合い方が、家族・医療者・友人など周囲の人との関係性の中で、どのように変化してきたかについて、小児の発達特性も含めて明らかにしようとするものであり、プロセスと他者との相互作用に特に着目している。

また、小児がん患者・経験者を支える医療者の一員（看護師・看護教員）として、身体面・心理面・社会生活の各側面とそれらの発達の側面を包括的に捉えて、闘病中から病気をもちながら発達していくことを予測して支援するための理論的説明が必要と考える。

したがって、現象のプロセス性および他者との相互作用性、ヒューマンサービス領域における支援のための理論生成をめざすという点で、M-GTA に適した研究であると考えている。

3. 分析テーマへの絞り込み

「小児がん経験者がどのように病気体験を受け止め、自分の生活の調整や生き方に反映してきたかというプロセス」

＊プロセスの始まり：病気を認識した時

＊プロセスの終わり：現在（インタビュー時；20～30 歳代）

4. インタビューガイド（調査内容）

- 1) 対象者の背景（基本的属性、疾患の背景、社会生活の状況）
- 2) 病気に対する思い（診断時～現在）、健康管理への取り組み（生活の調整を含む）
- 3) 自分に対する思い
- 4) 病気や自分に対する思いや行動に影響したと思うこと（周囲の人との関係・サポートを含む）

5. データの収集法と範囲

1) 調査対象者として設定した条件

以下の条件を満たす小児がん経験者

- ① 小児期（0～18歳）にがんを発症し、発症後5年以上経過している、現在20歳以上の人とする。
- ② 病名を告知されている。
- ③ がんの種類は問わない。

*成人した小児がん経験者に小児期のことを振り返って語ってもらうことで、様々な体験についての語り、自身のことを客観的に捉えた上での語りが期待できると考えた。

2) 実際のデータ収集方法と範囲

病院の小児科外来に受診中の小児がん経験者10名とセルフヘルプ・グループに所属経験のある小児がん経験者2名の計12名にインタビューを行った。対象者の年齢は20歳代8名、30歳代4名である。分析は1名について終了した時点である。

6. 分析焦点者の設定

「小児がん発症後5年以上経過し成人した小児がん経験者」

7. 分析ワークシート例：回収資料のため略

重要な概念の1つとして着目している概念で、概念名とヴァリエーションの妥当性を確認したいため「何とかなると信じる」を提示した。

8. カテゴリー生成・概念間の関係の検討：回収資料のため略

9. 結果図：回収資料のため略

10. ストーリーライン：未検討

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか

- ・書き入れた日付を入れ、概念生成時に考えたり迷ったりしたことを理論的メモに記載し、概念名や定義を修正した跡も分析ワークシートに残している。

- ・共同研究者（助言者）との打ち合わせ時に出た意見も理論的メモに記載している。
- ・注目する概念が生成されたら、それには何が影響しているのかを確認・検討するため、逐語記録や分析ワークシートのヴァリエーションを確認して、その概念に影響しそうなことを理論的メモに記載している。またヴァリエーションにないことで考えられる（他のデータであるかもしれない）ことや対極として考えられることも理論的メモに記載している。
- ・理論的メモをもとに、概念間の関係をノートに手書きで図式化し、さらにイメージが確かになったらパソコン上で図式化する。
- ・また分析を行う上で気が付いたインタビューの仕方の反省（もう少し確認が必要だったと思うことなど）を、理論的メモの下にメモしている。

***現象特性：**「生命が脅かされるような切羽詰まった状態を乗り越えてきた人達が、その影響を受けながら生きる人生と、新たな人生とを統合して意味づけていく過程」

12. M-GTA についての疑問

- 1) 対象者の疾患や発症年齢などの背景が様々であるが、すべてまとめて分析することは可能か？
- 2) 研究テーマである「病気を抱える自己に向き合う過程」の中心的なことと、それに影響する要因とをうまく関連づけて分析できていず、重要と思う概念間の関係が見いだせていないため、その理由を知り、今後の分析やデータ収集に活かしたい。まだ 1 事例しか分析していないことや、インタビューの仕方に問題があることなどが考えられるが、研究・分析テーマ設定にも問題があるのか確認したい。
- 3) 概念名が長いものが多いため、検討したい
- 4) データ収集終了をいつにするか → 分析を進めた上で判断したい

13. 主なご意見やご質問

- 1) 研究の動機や意義の確認
- 2) 分析テーマ・分析焦点者について
 - ・分析テーマの設定理由についてのご質問（「反映」という用語を用いた理由、「乗り越えた人」とそうでない人を分けずに分析焦点者や分析テーマを設定した理由）
 - ・分析テーマは漠然としていて大きいので、具体的に援助が必要な場面を追求するとよいというご意見
 - ・「病気体験を受け止めること」と、「生活の調整や生き方」とをリンクさせていない人もいると思うというご意見
- 3) 対象者の特徴について
 - ・発症後 5 年以上経過した方を対象にした理由についてのご質問

- ・外見から分かる症状や合併症のある人となない人との違いをどのように考えるか、そして分けずに分析する理由についてのご質問
- ・病名を説明される前に、病名を知った人がいたかというご質問

4) 分析ワークシート・結果図について

- ・〈何とかなると信じる〉という概念は、このようなポジティブな表現よりも、消極的なニュアンスの語り（ヴァリエーション）も捉えると、〈何とかなると信じるしかない〉という概念名が合うのではないかというご意見
- ・プロセスの始点は「病気を認識した時」という説明だったが、結果図には〈発症前からの病気のイメージ〉や〈楽天的な性格〉のようにそれ以前のことも含まれているのはこれらをプロセスの始点と考えているのかというご質問。
- ・結果図からは、下半分が闘病中のことで、上半分が闘病後のことに分かれるように見えるが、そのような捉え方でよいかというご質問。
- ・小児がんという命にかかわる病気を経験した人の親子関係やきょうだい関係は特別なものがあると思うので、それらがもっと出せるとよいというご意見。

14. 発表を終えての感想

発表までの準備段階で、SVの三輪先生よりコメントやご質問をいただき曖昧な点や説明不足の点に気付きました。それに対する応答を考える段階で、改めて自分の問題意識や研究の位置づけ・意義を確認できました。また、分析テーマ・分析焦点者の設定の再検討、現象特性の捉え方の再検討などができ、対象者の背景による結果の違いの有無の説明や、概念間の関係説明をもっと明確化することなどに気付くことができました。

もともと研究テーマも分析テーマも大きいと思っていましたが、発表時にやはり分析テーマが大きすぎるというご意見をいただいたので、再度検討したいと思います。

また、発表時にいただいたご質問に対する応答が端的でなく、フロアの皆様に理解しにくかったのではないかと反省しています。それにより、まだ整理が不十分な点が多いことにも気付きましたので、より分かりやすく説明できるようにしていきたいと思います。

さらに、分析結果は1事例の分析時点のものであったため、全体像が掴みにくく、フロアの皆様もご意見が出しにくかったと思いますが、発表させていただいたことで、曖昧な点をクリアにして分析を進めていく方向性が掴めたように思います。SVの三輪先生をはじめ、ご意見・ご助言をいただいた皆様に感謝致しております。ありがとうございました。

【SVコメント】

三輪久美子（日本女子大学）

小児がんについては私も研究テーマとしてきましたし、小児がん患児・家族の支援団体

とも長くかかわっており、まさにこの研究の対象者である小児がん経験者たちとも接してきていますので、今回、個人的にも大変興味深くご発表をうかがいました。

分析テーマについては、事前のやりとりの中で3度変更になり、最終的に「小児がん経験者はどのように病気体験を受け止め、自分の生活の調整や生き方に反映してきたかというプロセス」に決められました。これに決まる前の分析テーマは、「小児がん経験者はどのように病気体験を受け止め、自分の生活や生き方を調整しているか」ということでしたので、私のほうから、「生活を調整する」ことは理解しやすいものの、「生き方を調整する」ということは少し理解しにくいことをお伝えしたところ、それへの応答として「反映する」という言葉に変更されました。データを見ていく時には、分析焦点者と分析テーマの2つを見ていきますので、「自分が何を知りたいのか」を明確にして分析テーマを絞り込まないと漠然とデータを見ていくことになってしまいます。「反映する」という言葉は「調整する」よりも曖昧で広がってしまったような気がしますので、再度、最も自分が知りたいことを絞り込まれたほうがよいと思います。

今回は1名の分析を終えた時点でのご発表でしたので、1名のみから生成された概念で結果図を作成されるのはなかなか難しかったのではないかと思います。結果図では自分が明らかにしたいと思っているプロセス（うごき）が、始点から終点に向かってどのように進んでいくのか見えてくる必要がありますが（必ずしも直線的である必要はありませんが）、この結果図では、そのうごきが少しとらえにくいような気がします。まだ1例だけの分析ですので、これから分析が進むにつれ他の概念も出てくるでしょうし、現在、ご自分の中で中心的概念であると考えているものも異なってくる可能性もあるかと思いますので、もう少し分析を進めた上で、再度、結果図を検討していただければと思います。

また、結果図の中にある概念名についても、もう少し生き生きした「その人たちならではの」の概念名が出てくればと思います。この研究の対象者は、小児期に生死にかかわる病気に罹患し、その治療を乗り越え、思春期を経て成人になった人たちです。それがこの研究の特徴の一つでもあると思います。小児期での闘病中における患児と親との関係は、健康な子どもと親との関係とは異なる、非常に濃密で特別なものなのではないかと思います。その子どもが思春期を経て成人になっているということですので、思春期での親からの精神的自立なども、健康な子どもの思春期とは異なる「その人たちならではの」のプロセスがあったのではないかと思います。

「同胞との関係」という概念名がついているきょうだいについても同様のことがいえると思います。ある小児がん経験者の話ですが、その人は闘病中からきょうだいと仲が悪く、治療を終えてからもきょうだいとはほとんど口をきくことがなかったそうなのですが、一度激しいきょうだい喧嘩になった時に、きょうだいから「骨髄なんかやるんじゃないか」と言われたそうです。きょうだいとの関係についても、「同胞との関係」という概念名ではなく、もう少し「この対象者たちならではの」のリアルな経験を反映した概念名が出てくればと思います。

成人のがん経験者については、当事者たちの闘病記も数多くありますし、そうした人たちを支えることについての研究も数多く見られますが、小児期でがんを経験した人たちについての研究はまだまだ少ないと思います。小児がんの子どもの7～8割が治癒する時代となった今、病気を抱えながら、その後の長い年月の人生を生きていく人たちが増えており、非常に重要なテーマだと思います。今後のご研究の進展を期待しています。

◇近況報告：私の研究

滝澤寛子（京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻）

研究会の皆様、はじめまして。私は京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻（看護科学コース）の滝澤寛子と申します。専門分野は地域看護学／公衆衛生看護学です。大学では看護職の1つである保健師になるための教育と研究に携わっております。本研究会には昨年9月に初めて定例研究会に参加させていただいた入会1年目です。近況報告ということで、M-GTAで取り組んでおります研究テーマなどについて少し述べさせていただきますと思います。

私はこれまで、地域の人たちが自分たちで健康づくりを目指して活動するグループづくりに携わってまいりました。その中で、そういった健康づくり活動への参加に積極的な人と消極的な人が存在することに気が付きました。グループができて、その活動に参加するメンバーがいなければグループ活動の継続は困難です。身体的理由など、やむを得ない理由で仕方がなく参加できない人ばかりではないことも感じました。その人個人の健康という側面から、また所属するグループやまち全体の健康という側面からも、主体的に活動に参加する（参加し続ける）ことができるような工夫が必要だと思いました。そして、参加に積極的な人と消極的な人の違いは何かと考えた時に「自分の住むまちに対する思い」があるように感じたのです。健康づくりの行動に駆り立てる「自分の住むまちへの思い」とは何だろう、どのように形成されるのだろうか、そしてどのようにして健康づくりの活動に結びつくのだろうか・・・これを明らかにしたいと考えたのです。健康づくり行動につながる「自分の住むまちへの思い」を育むことに応用していきたいという願いもあり、M-GTAで挑戦しています。現在は、宮崎貴久子先生主催の質的研究勉強会にも参加させていただき、勉強会メンバーの皆様からのご支援いただきながら、目下、分析テーマの絞り込み中です。「分析テーマの絞り込みは重要」と教えていただき、その大変さと重要性を痛感しているところです。

これからも研究会への参加や、皆様からのご指導をいただきながら、M-GTAへの理解を深め、分析を進めていきたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

鷺巣禎江（早稲田大学大学院博士後期課程）

私は、地方都市にあるビジネス系専門学校の教員をしております。なぜ、大学院進学を決めたのかというと、これまで 20 数年間の専門学校教員生活の中で、近年、「なぜ、専門学校に進学したのか？」と感じる生徒が多く、特に、進路選択に関する親と生徒の葛藤や緊張、また、生徒と高校教員の意識の乖離が、どのようなしくみで成り立っているかを理解したかったからです。

修士課程時代の 2 年間、研究を進めるにあたり、現場のフィールドにいる教員という立場から離脱して考えようとする意識と、なかなか離れられない意識との葛藤に直面し、もどかしさを感じました。また、研究フィールドが勤務先であるために、多くの生徒と関わりさまざまなことを体験してきました。そのため、知りすぎていることを、どのように取舍選択し整理していくかも課題でした。

修士論文は、インタビューデータからラベル化し、そこから要約してさらにラベル化という、データから間接的に離れていく階層的なまとめ方でした。執筆後、振り返ってみると自分自身の主観が分析結果に影響を与えているのではないかと、であれば偏った見方の可能性があるのではないかと深い闇に入り込んでしまいました。

しかし、3 月の研究定例会に参加させていただくことにより、その闇にわずかな光を見ることができたように思います。それは、研究会から得られた刺激、そして、実証的な研究や、スーパーバイザーとのやり取りや質疑を聴くことで、自分自身の研究分析の視野の拡がりをもたらしてくれたからです。

M-GTA 研究会に入会させていただいたのは、分析方法の原則や現象の見方や言語化のセンスを磨きたいと考えたからです。今後も研究会に参加させていただき、M-GTA の理解をさらに深めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

田村愛架（鹿児島大学 教育学部 家政教育 家庭経営学研究室）

私は、「多重債務者のための効果的生活再建支援モデルと支援体制のあり方」について研究を進めています。つまり、多重債務者の生活再建を実現するための支援を具体的かつ実施可能なものとして提示することを目的として、①多重債務者にとって生活再建とはどのようなことかを解明、②①の生活再建を実現するための支援は、どのように行えばよいのかというモデルを考案、③②の支援モデルの効果を維持したまま、現支援体制に導入するための方策を検討します。

これら一連の研究にあたり、M-GTA は、①多重債務者にとって生活再建とはどのようなことかを解明するために用いる予定です。分析テーマは、「多重債務者がどのように生活を

再建していったかというプロセス」(仮)で、近々データの収集を行おうと思っています。

数か月前に会員になり、3月1日の研究会・懇親会に参加させていただき、諸先生方に上述の研究をしたいことをお話しした折には、「そのテーマであれば大丈夫」とご助言をいただきました。しかしながら、私は学部、修士、博士、職場が教育学部であり、周りにはM-GTAに精通した指導者はおられません。木下先生のご著書は揃えてありますが、研究を進めていく中で、自分のやっていることは正しいのかと不安になったり疑問に感じたりすることが多分にあると思います。研究会では、そうした不安や疑問を解消するとともに、M-GTAに関する蓄積0の状態を少しでも1に近づけていければと思っています。

最後に、懇親会の感想を一言。研究に関する話ができて、とても有意義です。私が所属する家政学会等の懇親会では、右隣の人が豚肉のタンパク質の繊維の研究をしているかと思うと、左隣の人は衣服の染料材料の研究をしていたりします。「スイヘーリーベークノフネナナマガリシップスクラークカ」の意味すら忘れてしまった私には、彼／彼女らの研究内容はわかりません(もちろん、もう少し小規模の学会であれば、そんなこともありませんが)。しかし、この研究会では、分野や領域が違っていても、M-GTAという共通の手法をとおして学び合うことができます。そのようなところに、魅力を感じています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

.....

根本愛子(一橋大学大学院言語社会研究科第2部門博士課程)

研究会のみなさま。一橋大学言語社会研究科博士課程の根本と申します。専門は日本語教育です。昨秋に博士論文「日本語学習動機におけるポップカルチャーの役割—カタールを事例とした量的および質的研究」を提出しました。カタールで私が教えていた「日本語講座修了生[=日本のポップカルチャーに興味があつて日本語学習を開始したとされる人たち]の日本語学習動機のプロセス」と、「カタール大学日本クラブ所属学生[=日本語講座に来ると期待されていたのに来ない人たち]が日本語学習の(不)必要性を認識するプロセス」をM-GTAで分析し、両者を比較することでポップカルチャーが日本語学習動機となるために必要な要因を検討したものです。

この分析のうち「カタールにおける日本語学習動機のプロセス」をM-GTA研究会で発表させていただいたのは、4年近く前になります。今だから言えますが、あの日の私にあったのは「緊張」でも「不安」でもなく、「恐れ」でした。研究会に参加している方々とは明らかに異なる日本語教育という分野で、周りに相談できる人がおらず一人で行った分析を、学習動機の研究をM-GTAでやってもいいのかという根本的な疑問を持ちながらの発表だったからです。ですが、発表ではフロアの方々から多くのご意見をいただき、また、休憩時間には何人もの方から声をかけていただきました。この方向で続ければ大丈夫なんだ…と安堵したことは、昨日のここのように覚えています。その後、休み休みではありましたが

が、何とか博士論文にまとめることができたのも、M-GTA 研究会のみなさまの暖かいご指導と励ましがあってのことです。木下先生には論文の審査までしていただき、お陰さまで、この 3 月に学位をいただけることとなりました。この場をお借りして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

私は学生生活と並行し、大学で留学生に日本語を教える傍ら、日本語を母語としない子どもの学習支援や、「やさしい日本語[＝文法や語彙をできるだけやさしくした日本語]」による外国人のためのニュースサービスの研究開発にも関わっています。こうした活動では「これは本当に彼らのためのことなのか、『これがいいことだ』と押し付けているだけではないか」と悩むこともあります。そして、その中には「これを M-GTA で明らかにしたら、よりよい支援が行えるに違いない」と感じるものもあります。

私の指導教官は常々、学位を運転免許に例えます。「一人前のドライバー(研究者)として認められたのではなくて、一人で運転(研究)できるという証。取得したあと、運転(研究)し続けなければ一人前にはなれない」のだと。ペーパードライバーにならないよう、今後はこれまでの日本語学習動機研究だけではなく、日本語学習者のためのよりよい支援につながる研究も行っていければと思っています。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

.....

牛窪隆太（早稲田大学日本語教育研究センター）

私は現在、早稲田大学日本語教育研究センターで新人日本語教師の成長プロセスを対象とした研究を行っています。私にとって、M-GTA とは、昔から名前を知っているし、気になる存在ではあるものの、本格的に勉強するには敷居が高いというものでした。ふとしたきっかけで、研究会の存在を知り、どんなものかのぞいてみようと思入会させていただくことにしました。その後、研究会のお知らせをいただいた際、今なら恥をかけるという突飛的な考えが浮かんでしまい、無謀にも初参加で発表者として名乗りを上げてしまいました。失礼になるのではないかとやや不安ではありましたが、事前のスーパービジョンでは、阿部先生に暖かく迎えていただいた上に、本当によくしていただき、当日の研究会でも、先生方から貴重なアドバイスをいただくことができました。

実際に自分のデータに即して、アドバイスをいただけることで、自身の M-GTA への理解が深まったことは言うまでもありませんが、その後も研究会に参加させていただく中で、それよりも大きな学びを得ていると感じています。それは、研究会が M-GTA を軸として、多様な領域の研究者の方が集まる場になっているということです。今まで自分の専門の中でしか研究を考えてこなかった私にとって、他の専門領域の先生方と研究について話ができる場は、とても刺激的であり、自身の研究者としての姿勢を考えるという意味でも、本当に勉強させていただいております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

.....

松戸宏予（佛教大学教育学部）

「M-GTA から学んだこと」

入会したきっかけ：M-GTA との出会い

私が M-GTA 研究会に見学者として参加したのが 2004 年 7 月でした。同年 12 月に入会した当時は、学生 D1 という立場でした。博論における問いは、「特別なニーズをもつ児童生徒に学校図書館からどのような支援ができるか」です。2004 年 5 月、先行研究の核になった Murray, Janet が自身の博論のなかで、「理論はグラウンデッドセオリーを援用するが、アプローチはケーススタディで行う」と述べていました。このとき、グラウンデッドセオリーとは何か。なぜ、Murray は理論とアプローチを分けるのかといった疑問を抱きました。

そして、公共図書館で木下先生の『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』（2003）に出会いました。その本に紹介されていた M-GTA の例として、生徒が保健室をどのように捉えているのか、「生徒が『回遊魚』のように保健室を利用する」といった記述があり、興味を覚えました。なぜなら、学校図書館でも生徒が「回遊魚」のように保健室、スクールカウンセラー室、そして、学校図書館を利用しており、実際に職員の間で「回遊魚」という表現を使っていたからです。そして、2004 年 6 月に、保健室を取り上げた酒井都仁子さんの修論を閲覧するために、千葉大学の岡田加奈子先生を訪ねました。その時に、岡田先生から、7 月に M-GTA の研究会があることを教えてもらいました。このような経緯が入会したきっかけです。

M-GTA 研究会に参加して

① M-GTA の分析テーマから論文作成までの指針

初めて研究会に参加した際に、水戸美津子先生が、参加者全員に「木下先生の本をテキストとして何度も読んで、研究会に参加してください」というアドバイスがありました。そのアドバイスを受けて、木下先生の本を何度も読みました。そして、研究会に参加する度に、自分の研究進捗の段階に焦点を合わせて、報告・質疑応答を聞き、自分の場合はどうなのだろうと振り返りました。1 つ 1 つの過程を踏むことを通して、論文という形にまとめていけたと思います。M-GTA 研究会は私にとって、ペースメーカー的な役割を果たしてくれています。

② M-GTA で得られた理論を体験する

2 年間の非常勤講師をした後、2010 年 4 月より京都の佛教大学に勤務しています。京都市に居住を移す前は、知らない場所で適応できるかどうか不安がありました。しかし、朝のラジオ体操を京都でも行えること、松戸市にある伊勢丹とマツモトキヨシは、京都市にもあること。私にとって、ラジオ体操、伊勢丹とマツモトキヨシが、小倉啓子先生が高齢者介護施設利用者の生活適応プロセスで出されていた「オダマキ」だったのです。共通点を見つけることが生活適応のきっかけになるのは、介護施設利用者だけではないことを実感しました。

現在の研究と関連して：現象面と意識の背景を探る

2010 年 10 月より、イギリスの大学図書館員を対象に、特別なニーズをもつ学生に、大学図書館はどのような支援を行っているのかについて、これまでに、ウェブサイトの分析調査、フィールド調査を行いました。2014 年度は、オンラインによる質問調査を 2 月～3 月にかけて試みしました（68/152 件回収率 45%）。4 月～7 月にかけて、分析を行う予定です。

しかし、量的調査であっても、質問設計や、統計処理を行ううえでの基本は、M-GTA で学んだことと重なります。概念と概念をつなぐ背景には何があるのか、核となるカテゴリー（根底となるものは何か）、結果からストーリーラインを描けるかを念頭に質問設計を行い、統計処理を行います。また、研究メモをつけることも、M-GTA から学びました。このように、M-GTA を継続的に学ぶことは、私自身の生活や研究にヒントを与えてくれるのです。今後もどうかよろしくお願い致します。

.....

◇第 68 回定例研究会のご案内

日時:2014 年 5 月 24 日(土) 13:00～18:00

会場:立教大学(池袋キャンパス)10 号館 3 階 x304 教室

◇編集後記

寒い冬からやっと抜け出したと思ったら、桜の花びらが舞っております。NL（ニューズレター）も皆様のご協力で、研究会後、1 か月ほどで皆様のお手元に届けられるようになり、内容も豊富なものとなっております。活用していただければ嬉しく思います。過去の NL はホームページにありますので、参考にしてください。これからもご協力よろしくお願いいたします。（林）